NO. 58
March '15
KGWIS newsletter
神戸女学院大学
女性学
インスティチュート

「社会が女性を求めるということ」

溝　口　　薫

最近の若い世代は、女性学に対する反応が今ひとつ弱いなどとよく言われているが、それにはもっともな理由もある。男女平等が実現された教育社会や家庭の中で育ってきており、今更女性の社会的権利に関する言説などは、ピンとこないらしい。もちろん、卒業して社会に参加すれば、途端に男女格差の現実にぶつかることは必至で、そうした事例に触れて始めて「現実」に覚醒するようだ。とはいえ、彼女たちは、女性学について理解を深めてさえ、結局、本気で女性の社会的立場や権利意識の問題に関わることはせず、周囲の期待に添う素直な「物分りの良さ」を発揮する方が多いようである。別に言えば、それは思考停止、あるいは、自分を諦める不利な日和見ともいえるのであるが、それはそれだけ、女性をめぐる文化的制限の根深さを直観しているからともいえる。男性のように働けば、女性らしくないといわれ、まして女性の権利に敢えて拘ろうとするなら、厄介な人とみなされかねない、建前と異なる見えない制限はまだ確かに社会に働き、また女性側でもまだ半ばそれらを内在化しているのである。だからこそ、女性の選択は、男性ほどは自らの自由な活動を求めて一歩を踏み出す勇気が持てないのだろう。

2014年３月、「アトランティックマンスリー」誌は、高学歴を達成したアメリカ女性たちが、なぜいまだ社会進出にさらなる一歩を踏み出せないでいるのかを、女性の男性に比しての「自信のなさ」に焦点を当てて特集している。つまり前述の状況とは、社会的進出を熱心に求める女性においてさえも直面するものなのであり、現在の女性を取り巻く問題は、それだけ複雑なのだ。もちろん、こうした状況を打開するためには、まずはこうした選択の場でより積極的な選択ができるよう女性の意識を変えていくことが重要だ。また、差異を強化するような社会構造をインフラから変える努力も同様だ。だが、今こうした状況を打開するために、さらに必要なことは何だろうか。それは、ともかくも社会が女性を必要としているという事実を具体的に示していくことではないだろうか。それにより、女性は、積極的な選択を、アクションをはるかに取りやすくなる。

2014年11月14日の『ナショナルグラフィックニュース』に「科学の分野ではなぜ女性が必要なのか」という記事がある。記事の前半は、科学、テクノロジー、エンジニアリング、数学というこれら三つの分野で活躍するアメリカ女性の割合が、1970年には７％、1990年には23％まで伸びたが、20年後の2011年では、女性の割合は26％で、この20年は横ばいが続いていることを報告、その理由を述べている。曰く、女性は小さいときから科学以外への興味を持つように促されたり、職場でも妊娠出産によってキャリアを継続できないという種々の外的、文化的要因があるからなのだ。しかし、続けて記事は、女性が科学の分野で働き手が不足するとどのようなことが起こるかを述べ、例えば、女性が男性と比べて質の高い医療を受けることができなくなる可能性があることを指摘する。女性特有の疾患の存在、また、女性にだけ副作用がおきる薬品の危険である。特に後者に関しては、薬品の臨床試験が男性の平均体型を対象として服用の目安量が作られているため、女性の場合に出る副作用の研究が必要なのだという。記事は、これらは性を「変数として」考慮しない医学研究の手続きが習慣化していることが原因とし、社会全体の福祉向上のためにも、女性目線の研究の必要を説くのである。もちろん医学以外にも、歴史的に男性が多い分野においては、女性が進出することによって、その分野の一般的な知識が拡大することが多く、例えば、歴史学、霊長類学、生物学、などが例だという。また、ビジネス界では率先してその事例が上がっているとし、ゴールドマンサックス、コロンビア大学などによる多くの世界的な研究が、女性を数多く採用している企業の利益が、競合他社を抜いていると報告したと強調している。実際、投資ディーラーも女性のほうが、長期的見通しにたった場合は、男性よりも成績が平均的によいという事例もある。

溝口　薫 教授

女性の視点の社会相補性は、もっと社会のためになることが強調されてよい。きたる高齢化社会に向けては、老人の一人暮らしを援助する技術や商品の開発などにも、もっと女性の視点は必要だ。社会のインフラ整備においても、男性と協力して多角的視点から物事を解決していくことが期待される。女性が自然に起用される場を広げていくこと、それが現実への切り札なのであって、女性が切り札だなどという建前論はいらない。そのためには、女性の視点が必要な場面をもっと具体的に明らかにすることだ。彼女らは、もはや男性に劣らず、社会貢献のために十分な力を持っていることは証明済みなのだから。　（文学部教授：英文学）

女性が“働ける”職場・社会づくり ～神戸女学院をそのモデルに～

矢　野　円　郁

私の中に新たな生命体が宿ったのは、生誕劇で受胎告知を受けて約10ヵ月後のことでした。執筆時現在15週目で、いまだその“実感”は持てないでいますが、検査結果や眠気、息切れ、白髪発見……といった体の不調で間接的に認識しています。発覚当初は、喜びよりも、仕事への焦りや高齢出産の不安の方がよっぽど大きかったのですが、本学の皆様のお蔭で、そういった負の感情を喜びが上回るようになりました。妊娠の報告に対して、温かい言葉、祝福の言葉をいただきました。私が産休を取ると皆さんの負担は益々増えますので、お伝えするのが本当に心苦しかったのですが、今後のことよりもまず先に、皆さん私の体のことを気遣ってくださり、新しい生命の誕生を（私以上に）喜んでくださって、本当に有り難い気持ちでいっぱいになりました。

今まで、妻や母親になることよりも職業人として生きることを優先してきた私が、子を授かりたいと思えるようになったのは、（育休は自分が取るという）善きパートナーを得たこともさることながら、神戸女学院という恵まれた職場環境を与えられたことが最大の理由です。昨年度本学に就任するまで安定した職につけず、産休も取れない身分、取れたとしても次の職へのステップアップは断念せざるを得ない状況でした。「オマエらが子どもを産まないから少子化になる」と罵倒されながら、妊娠すると解雇されるといった職場も見てきました。政治家の度重なる失言にもみられるように、まだまだ日本は女性が働ける社会とはいえません。本学のような環境が全国の職場に浸透し、女性が（も）仕事と子育てを両立できる社会の実現に向けた取り組みを推進していく必要があります。

これから出産前も後も、どんな困難な事態が訪れるかわかりませんが、この職場であれば、どんな困難も乗り切って、職業人として生きていけると思うのです。本学就任当初に強く感じた幸せを、今再び感じています。この場をお借りして感謝申し上げます。また、次年度私のゼミを希望してくれていた学生さん達には申し訳なく思いますが、一緒に学ぶ機会はゼミ以外でもありますので、今後も有意義な大学生活を送っていってくれますように。（人間科学部准教授：認知心理学）

息子が教えてくれること

奥　野　佐矢子

今年１月に４歳になった息子。文字に興味を持ち始め、特にひらがなの「き」がお気に入り。

書斎にいきなり乱入してきて「母ちゃんの本には字がたくさんある」と阿部謹也の『ヨーロッパ中世の宇宙観』（講談社学術文庫、1991年）を手に取る。不意に「母ちゃん、『き』がたくさんあった！」と声をあげる。見るとそれは「ハーメルンの笛吹き男伝説の成立と変貌」という論考、中には≪笛吹き男≫という表記が散りばめられている。あるいは新聞をじっと眺めていて突然「母ちゃん、『き』あった！」と叫ぶ。彼が指さす先には、見出しではない細かな文字の本文中に「大『き』な転換」という文言。

息子が文字と付き合う時の作法は、大人である私のそれとは明らかに違う。 私自身は、無意識に文字のひとかたまりである語句を拾い上げ、その意味を取り込みながら読んでいる。だが彼は、文字を「カタチ」で認識しており、新聞の厖大かつ細かな文字の中から瞬時に（しばしば私よりもずっと早く！）『き』だけを探しだす。

そんな息子とかるたを楽しんだお正月。その最中、不意に彼は気づく。「母ちゃん、『き』は『にほん』、『さ』は『いっぽん』、『ち』は『はんたい』！」。確かに「き」と「さ」と「ち」はカタチとして似ている――その「わかり方」に、今度は大人の私がはっとさせられる。彼は私とは違ったかたちで世界を見ている。それがすごく面白い。

私たちは言葉と意味とをつい結び付けて考えがちだ。だが本来、ひとと言葉との関わりには別の様式もあることが思い起こされる。たとえば梵字や般若心経。ひとはその意味を十全に理解することはなくても、それらの文字の形や音のもつ力に惹かれ、繰り返し見、唱えることによってそれらを身体化していくことができる。さらには、そうした言葉との関わりにおいて、必ずしも意味は必要とされない。息子の文字との付き合い方は、普段忘れ去られがちなそうした別様の何かを、私に思い出させてくれる。

子育ては留学と似ている。目の前に居る異文化が、私が知っているつもりの当たり前の世界を、全く違う世界へと変えていく。　（文学部准教授：教育学）

2014年度 活動報告

■講演会・セミナー（一般・学生対象）

4月	特別講演会 「女性差別撤廃、ジェンダー平等の実現という課題にめぐりあって ～わたしの物語～」
	4／25（金） 10:35～11:25 神戸女学院講堂 講演者：特定非営利活動法人 グループみこし 理事長 米田 禮子 氏 参加者：70名
5月・6月	連続セミナー「母と娘」(全4回／5月・6月開催)
	5／23（金） 14:00～15:30 第1回 「摂食障害と母娘関係」 講 師：神戸女学院大学 名誉教授 生野 照子 出席者：一般35名、学生6名 計41名
	5／30（金） 14:00～15:30 第2回 「母と娘 ～その光と闇～」 講 師：人間科学部 心理・行動科学科 教授 國吉 知子 出席者：一般30名、学生2名 計32名
	6／6（金） 14:00～15:30 第3回 「母たち娘たちがいる風景：子育て支援の現場から」 講 師：文学部 総合文化学科 専任講師 戸江 哲理 出席者：一般30名、学生5名 計35名
	6／13（金） 14:00～15:30 第4回 「夜も更けた室内で、母娘の憎悪は燃え上がり ―イングマール・ベルイマンの『秋のソナタ』」 講 師：文学部 英文学科 専任講師 高村 峰生 出席者：一般30名、学生6名 計36名
	受講者数累計：一般31名、学生8名 計39名 修了証交付：39名

■学生対象プログラム

年間	授業 Cu134(1)(2)「女性学（実践編）」 Cu234(1)(2)「女性学（理論編）」 Cu133(1)「ジェンダー・スタディーズ（I）」
	インターディシプリナリー・プログラム 修了証交付：1名
7月	第16回「女性学インスティチュート賞」 学生懸賞論文 1編応募 最優秀賞：1編 中川 侑香（2014年3月 文学部 英文学科卒） The Sexual Revolution in the 1960s and the Crisis of Masculine Identity in Raymond Carver's "Vitamins" （レイモンド・カーヴァーの「ビタミン」における1960年代の性革命と男性のアイデンティティの危機）

■発行物

10月	newsletter №57
1月	『語り継ぐ女性学 ―次代を担う女性たちへのメッセージ―』
3月	newsletter №58
	『女性学評論』第29号

<4/25 特別講演会>

<5/23 連続セミナー 第1回>

<5/30 連続セミナー 第2回>

<6/6 連続セミナー 第3回>

<6/13 連続セミナー 第4回>

2015年度 スケジュール

■講演会・セミナー（一般・学生対象）

4月	**特別講演会 「『授かる』から『作る』へ？ ―生殖をめぐる技術の発展と課題」** ＊申込不要
	5／15（金） 10:35～11:25 神戸女学院講堂 講演者 ： 大阪大学大学院 医学系研究科 小門 穂（こかど・みのり）氏
5月・6月	**連続セミナー「はたらくこと・そだてること」（全4回／5・6月開催）** JD-104 ＊申込不要
	第1回 5／22（金） 14:00～15:30 奥村 キャサリン 文学部 専任講師 「男性から見た「ワークライフバランス」：日本と他国男性の意識調査から分かったこと」
	第2回 5／29（金） 14:00～15:30 北川 将之 文学部 准教授 「インド農村議会の女性議員の子育てと仕事 ―マイクロファイナンス・留保制度・政治意識」
	第3回 6／5（金） 14:00～15:30 松尾 歩 文学部 教授 「子供のことばを育てること ―言語習得の調査から分かった親のできることとは？」
	第4回 6／12（金） 14:00～15:30 高岡 素子 人間科学部 教授 「理系女子の生きやすさ、生きづらさ」

■学生対象プログラム

年間	授業 ＊人数制限あり。登録時、要確認
	Cu134(1)(2)「女性学（実践編）」（横田恵子教授、南條理恵子先生、野澤萌子先生） Cu234(1)(2)「女性学（理論編）」（井上紀子教授、渡部充准教授、林葉子先生） Cu233(1) 「ジェンダー・スタディーズ（Ⅱ）」（荒木菜穂先生）
	リベラルアーツ＆サイエンス・プログラム（副専攻：女性学）
	・説 明 会：2015年7月（日時決定後（5月頃）教務課が掲示） ・受付・選考：2015年10月 ・履 修 時 期：2年生前期～4年生前期 ・アカデミック・アドバイザー：女性学インスティチュートディレクター
7月	学生懸賞論文 第17回 「女性学インスティチュート賞」
	・対 象：在学中および2014年度卒業の本学学部生・大学院生が執筆した「女性学、ジェンダー・スタディーズに関連する領域の論文」 ・締 切：2015年7月8日（水）16：00（必着） ・選考結果発表：2015年10月（予定） ・表 彰：「最優秀賞」 1編（賞金5万円および賞状） 「優 秀 賞」 2編（賞金各2万円および賞状） ・論 文 発 表：『女性学評論』第30号に、最優秀論文全文、優秀論文要旨、掲載予定。 ＊「募集要項」は、女性学インスティチュートもしくは下記URLよりご確認ください。 URL http://www.kobe-c.ac.jp/gender/topics/201516.html

■発行物

10月	newsletter №59
3月	newsletter №60
	『女性学評論』第30号

編集・発行：神戸女学院大学 女性学インスティチュート

女性学インスティチュート委員会：横田恵子（ディレクター）、難波江和英（研究所長）
景山佳代子、金田知子、金山千広、高村峰生
編集事務：亀岡裕子、増田香織、三枝祝里子、翁由枝、吉永真理子

〒662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL 0798-51-8545 FAX 0798-51-8527
URL http://www.kobe-c.ac.jp/gender/ e-mail : wsi-o@mail.kobe-c.ac.jp